

庁舎周辺のまちづくり検討加速

熊本市 委員会、ワークショップなど開催

庁舎建て替えを表明している熊本市（大西一史市長）。熊本市新庁舎整備を契機としてまちづくりについて検討を行う「庁舎周辺まちづくりプラン（仮称）等検討委員会」（委員長＝岸井隆幸日本大学名誉教授）の初会合を4月に開いて以降、オープンハウスを通じた市民の意見収集、公募市民らが参加したワークショップの開催、同検討委員会の分科会やまちづくりシンポジウムを開催するなど、庁舎周辺を含めたまちづくりについての検討が加速している。今月の動きをまとめた。

（編集部・宮崎泰樹）

分科会で基本計画骨子案を公表

庁舎建て替えを巡っては24年8月に市役所本庁舎の建設予定地が商業施設「サクラマチクマモト」に隣接するNTT桜町ビル敷地に、中央区役所を花畑町別館跡に移転建て替えることを前提に基本構想を策定している。

検討委員会は新庁舎整備を契機とし現状の課題を解決するとともに、都市の発展につながるまちづくりを実現していくために、まちづくりの方向性や考えた方についての検討を行う。具体的には、現庁舎跡地の利活用、新庁舎と周辺との連携などをテーマに議論し、現状把握、課題抽出、整理、重視すべき視点

や将来像などについて意見を取りまとめ2026年度中のプランの策定を目指す。

4月の第1回会議で設置を決定した3つの分科会のうち、「現庁舎跡地（周辺）利活用検討分科会」と「まちなか再生・賑わい波及検討分科会」は7月23日に非公開で初会合を開催。8月1日には新庁舎整備基本計画検討分科会の初会合を開き、全ての分科会が初会合を終えた。

そのうち、公開された新庁舎整備基本計画検討分科会（分科会長＝田中智之早稲田大学創造理工学部教授）では、委員に対して委嘱状の交付や分科会の役割について市の担当者が説明し、基本計画の骨子案を公表し

た。今後、コンセプトの整理、本庁舎や議会、区役所などの各機能の方向性、動線計画、構造計画などを審議し基本計画案をまとめるという。

分科会終了後、取材に応じた



▲1981年の完成から44年が経過した熊本市役所。建て替えに向けた議論が進んでいる

検討委員会の副委員長の田中分科会長は基本計画の骨子について「基本的な骨格はできていると思うが、『熊本市ならではの』というのがあいまいである。熊本地震を経験した熊本市だからできる防災面の内容を盛り込みたいという話があったが、これから検討が必要。市民と庁舎の関係に関する検討もまだ足りないと思う。社会の変容を想定しながら、機能や規模などを考え、時代を見据えて議論を重ねていく」と語った。

まちづくり研究チームを設置へ

8月8日には、熊本市中央区の中央公民館で、検討委員会の

第2回会合が開かれ、学識経験者、団体、行政機関の代表など委員15人が出席。今回の会議では、市職員から分科会での意見を踏まえた経過報告や熊本経済同友会、熊本商工会議所などの経済団体の提案が行われた。団体からは、新庁舎と街なかをスムーズにつなげる歩道橋や地下道の整備、熊本城からの人の流れを中心市街地に引き込む導線の整備、現庁舎跡地の利活用については公共交通をセットにしたまちなかの再開発、周辺部の当事者へのヒアリングを基に迅速な計画策定を求める意見が相次いだ。



▲庁舎周辺まちづくりプラン（仮称）検討委員会の第2回会合

意見交換の中で、市は市民と経済界、民間事業者が新庁舎整備を契機にしたまちづくりについてアイデアを交わす『まちづくり研究チーム（仮称）』を設置し、今後、メンバーの募集方法を検討することを確認した。

終了後、取材に応じた同委員会の日本大学名誉教授の岸井隆幸委員長は「現庁舎跡地（周辺）利活用検討分科会とまちなか再生・賑わい波及検討分科会の委員は専門家で構成されているため、研究チームの設置により市民意見の反映を期待したい。昔のように公共、民間、市民と分かれている時代ではない。共につくるような空間がとても大事だ。検討の段階から市民がまちづくりのプレイヤーとして参画してもらうのはまちづくりとしてプラスになる」と語った。

第3回ワークショップも開催

さらに熊本市は8月3日、熊本市中央区のシアーズホーム夢ホールで、新庁舎整備に関するワークショップを開き、市民や学生たちが意見を交わしたほか、大西市長も駆け付け、議論の行方を見守った。

新庁舎に整備予定の市民利用スペースについて、必要な機能などを市民から直接意見を聞くために開催したもの。6月、7月の開催に続き3回目。これまでに「まちなか庁舎を語ろう！」「新庁舎をどう使う！？」のテーマで意見を交わし、中心市街地における新庁舎のニーズや、新庁舎での過ごし方をイメージしてきた。最終回となる3回目は「新庁舎の未来を思い描く！」を主題に新庁舎をいかに作るか、未来を思い描いた。

冒頭あいさつに立った大西市長は「皆さんがどういう意見を出されたか、という報告を毎回受けている。大変楽しみにしている」と謝意を示し、カムチャツカ半島で発生した大地震時に鎌倉市議会の議場を避難者向けに開放したことを紹介し「普段から災害時のことを想定していないとスムーズに受け入れることはできないと思う。例えば、議場を議会が利用しないときには、市民の方が会議をしても良いような、そういう市民利用を考えながら、新しい付加価値を考えていただきたい」とあいさ



▲新庁舎整備に関するワークショップ。大西市長も議論を見守った

つ。その後、市民ら約40人が7グループに分かれ、フロアごとに市民スペースの役割や機能を議論。新庁舎の未来、市民利用スペースなどについても意見交換した。子どもの遊び場や学習の場など、市民が利用するスペースについてアイデアが出たほか、熊本地震の経験から屋上にヘリポートを設ける案、市職員らにまちづくりへの意見を伝える「まちの声ボード」の設置、市役所に親しみを持ってもらうために愛称を付ける提案もあった。